

「展評」

「美術界」 春陽会の諸作（上）

明るき作 朗かな作

金井 紫雲

金井紫雲（かない しうん／本名・泰三郎 明治二十一年・一八八八年—昭和二十九年・一九五四年）

群馬県高崎市生まれ。十四歳で上京、独学で勉学。坪内逍遙、田村江東らの薫陶を受ける。中央新聞社に入社、社会部勤務。大正十年都新聞社に移る。学芸部長となり主に美術記者として活躍する。趣味は広範囲に及び、美術、盆栽、花、鳥等に専門的な研究を行い、多くの著書を著す。

春陽会は今年十二回を迎へ、そしてその特別陳列に、創立者の一人である森田恒友氏の遺作を飾つた。二室をそれに充て、二回も陳列替を行ふほどの盛況で此の遺作室が、今年の美術界の大いなる収穫であることはいふまでもない。その青年時代の作から、シヤパン又張りの題材筆致を用ひた時代、好んで平野に心を寄せた時代、得意の水墨画、乾墨画と、かう並べて来ると、如何にも心静かな故人の画境が偲ばれる。故人が詩人であり且

つ画人であるその本来の面目は此の催しにより、一際鮮やかに印象づけられたことと思ふ。

さて次に今年の出品を見る。まず第一室に入り、直ちに感じられるのが、絵の明るさ朗らかさである。大澤鉦一郎氏の諸作をいの一展に展べたものも、著るしい現はれの一つである。《花もつ少女》など何といふ朗らかさだ。ルッソーでもやりさうな仕事である。岩田栄之助氏の《波太》《会津風景》如何にも真摯なる努力である。

画の構成にも些かの無理がない、大森啓助氏は面白いものを掴んでゐる。《競馬場所見》など観客の足を止めさせるに充分であり、《裸婦》にも技倆の奥行が見える。宮脇晴氏の作も嬉しい。鬼塚金華氏は滋味にやつてゐる。だがその植物の緑の中には充分の含蓄のあることを明示してゐる。（サルヴアトウレ・）メルジェ氏の《コマンドトウレ・シモイの像》はそれ程の作でもない。

第二室に入つて、水谷清氏の《炬燵》は器用である。材料の配置も中々気が利いてゐる。《生蕃娘》は力作であるが、色彩の複雑性が一種溷濁した感じを伴はせる。坂口右左視氏の《並木立》その他は、健全な作だが何となく引立たない。遠藤典太氏は《雪景》その他でいろいろの試みを見せてゐる。

第三室で青山義雄氏の作はまた一転機を示した。今年は非常に美しいものとなつてゐる。《郊外》などの構図の妙味は、一寸他に類がない。《花（一）》、

(2)も色を活かしてゐる。楊佐三郎氏の《ルクサンブル公園にて》その他、努力の割合にパツとしない。刺戟性に乏しい憾がある。足立源一郎氏の《白馬連峰》《後立山の春》は山岳画家としての地歩を力強く踏みしめて行つてゐる。長谷川昇氏は《緑蔭》の大作で、制作に十分の精進を見せた。

コロリーにかうした図のあることを連想せしめたが、扱はれた人物に現代性が現はれてゐるのが争へない。《Y夫人》や《少女と子猫》は如何にも素直な反感のもてぬ作風である。川端彌之助氏のスツキリした作、また此の会のもつ特色の一つ《御室の塔》が美しい。倉田白羊氏は《たそがれ行く》に外光の研究を見せた。聊か古風だが、かうした仕事も意味はある。若山為三氏の作を見ると、涼しい浴衣ゆかたを連想する。鮮麗そのものである。

第四室に別府貫一郎氏の《雪の金閣寺》がある。気の利いた作だ。《下加茂神社》も渋い才気のある筆だが、新会員として、今少し大作に向つてほしかつた。石井鶴三氏の《少女坐像》は氏の持味と深みがよく出てゐる。

《手術》も容易に手のつけられぬ境地である。氏がこれをうまく画面に取り入れてゐるのは、熱心なる写生慾たまものの賜ではないか。林倭衛氏の気の利いた作品数点、どれを見ても冴えたものだと思はせる、構成の上の呼吸を飲み込んでゐる。だが氏を今の内面的苦境より救い出して、思ひのままに大作に筆を運ばせたい。かうした感じを氏の作の前に懐くいだのも決して私ばかりではあるまいと思ふ(*)。鬼頭壘二郎氏の《渥美海岸》風景はどれも手に入つたものである。《波(1)》、《(2)》二題が面白く見られた。中村清太

郎氏の《嶮山》は山岳画家として昔が懐かしい。

〔都新聞〕 昭和九年五月五日付

* 第十二回展終了後の七月十八日に青山義雄、林倭衛(以上会員)、坂口右左視、田中万吉、橋本節也(以上会友)が退会。十一月に鬼頭壘二郎、木下孝則、別府貫一郎(以上会員)、大森啓助、岡田七蔵(以上会友)が退会。

「美術界」 春陽会の諸作（下）

新会員の努力ぶり

金井紫雲

第五室では小栗哲郎氏の《晩秋の山》その他鋭敏な感覚でよく自然を掴んでゐるのが目に立つ。《富士川》もよい。木村莊八氏は《わたしのラバさん》一齣《といふユーモアたつぷりの題材を扱つてゐる。構図も色も、

細心の注意が払はれてゐるが、氏には今少し大作を見せてもらひたかつた。佐藤道顯氏の《千川上水》の渋い色調の好みが目をはひく。今関啓司氏は特色のある画風の持主である。その中でも《小品山海（A）、（B）、（C）》は愛すべき作品である。橋本節哉氏の諸作、何れも美しいが、今少し内容的に豊富でありたい。これだけではつまらない。

第六室に入ると、中川一政氏の諸作が矢張貫禄を示す。《春淺》にせよ《山川呼応》にせよ、^は将たまた《霜の山》にせよ、その筆が如何にも詩趣に満ちてゐる。國盛義篤氏の作は、著しく明るくなつた。そして潤ひのある色が一種の懐かしみを感じせしめる。栗田雄氏の《うすれ日の静浦》その他、画面やや錯雑して観者を眩惑せしめる。紫色を駆使した線が今少し慣れたらばと思ふ。倉田三郎氏の《日連村》は無難な出来である。

第七室から八室にかけて、山崎省三氏の作がある。「台湾婦人」の横向き

は愛すべき小品だ。《牛つき合せ》など珍らしい題材である。伊川鷹治氏の《むしかれい》は流石に魚をよく見てゐる。鳥海青児氏の作は、やや暗い感じが深すぎるが仕事には才気煥発。《アラビア風の家》《ノートルダム・ド・パリー》などその特色を發揮してゐる。小穴隆一氏が此の室に美しい仕事を見せてゐる。《扇》《鏡》何といふ洗練し切つた技であらう。新会員としてよくその持味を示したものだ。上野春香氏の《北海道阿寒》は面白い。《鎌倉期阿修羅》は道楽が過ぎてゐる。

第九室に入ると小林徳三郎氏の作がある。《びわ》の如き色調もよく整い深味もある。近頃健康を回復して、制作にいそしんでゐるのは慶すべきである。山本鼎氏が《朝鮮の壺へ活けた花》外四点を出した。《海》など如何にも美しい手慣れた仕事である。《メノコのクロッキー》が題材も珍らしく足を停めさせられる。横堀角次郎氏の作では《共同印刷》に研究の跡歴然たるものがある。《顔》は苦心の作の割合に効果的でない。

第八、九の二室は森田恒友氏の遺作室である。飛んで第十室では高橋貞一郎氏の《髮結之図》が一寸面白い処を狙つてゐる。

第十一室は水墨や乾墨の室。小杉放庵氏の《草木春秋》が場を圧してゐる。二曲屏風に地紙を散らし、それに一枚一題づつを描いてゐるが、「アマリス」や「木瓜^{ぼけ}」など朱の色の冴えが非常に魅力がある。「太山本」などは極めて皮肉な処を描いてゐる。此の室で木村莊八氏の「小説霧笛」の挿

絵（一〜八）は立派なものだ。

版画では、富力富吉郎氏の《白い門》、野村俊彦氏の《ハリケン》その他があり、やや気を吐いてゐるし、古川龍生氏の《蟲の楽土》など面白いが、前川千帆氏の作がないのは寂しい。総じて今年は版画は揮^{ふる}はず、此の室では中川一政氏の《山中觸月》（水墨 其一〜五）や石井鶴三氏の《人体クロツキー》（一〜五）の軽妙な線に心の満足を得る程度だ。

第十二室では山川清氏の《半裸の女》が何処にか注目させられる。斎藤清二郎氏の文楽ものは流石に多年の研究である。伊藤慶之助氏の《踊るレビュの女》など木村氏の作と対照の興味を唆^{そと}る。

第十三室では加山四郎氏が新会員としての努力を見せ、十四室では藤堂李三郎氏の《早春蔬菜図》（其一、二）と一木諄氏の裸体数点が強烈なる色調を以て観者を魅了し去る。だが、多く陳列されると少しく濃厚に過ぎる。

総じて新会員何れも相当に努力してゐるが、その仕事は、これからがみものとなるであらう。

『都新聞』 昭和九年五月六日付